
切り裂きジャックは殺しません!裏面?

和呼之巳夜己

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

切り裂きジャックは殺しません！裏面？

【Zコード】

Z7964E

【作者名】

和呼之巴夜己

【あらすじ】

本編に関係があるような無いような人物を中心にピックアップして出来上がる外伝登場！！！

桐原須藤主役の短編、さらに切り裂きジャックたちのサイドストーリーでも網羅している気分の切り裂きジャック裏面版チョコチョコ更新で登場！！！死闘を繰り広げた強敵、どうでもいいサブキャラまだもが総出演確約の裏面、出現！

BLACK/IN/THE/SKY (前書き)

ハ迫は、桐原須藤戦が終わったあと、ふと思い出す。あいつとの腐れ縁はどこから始まつたのか。そして記憶をたどるハ迫と対に孤高の天才桐原須藤の思考も混ざる切り裂きジャックは殺しません！初のが遺伝シリーズ第一章を飾るのはこれだ！

BLACK/IN/THE/SKY

第一章 RED・BLACK

壹 DARK/IN/THE/SKY

何年か前。俺が須藤と出会ったのはいつ頃だろ？ そうだ。入学式の時。

八迫は日記を読み返し、思い出した。

幼少時切り裂きジャック予備校にて

教室で一人ぽつんと座っている子をみた。八迫は友達になろうとの子の机に向かった。

「ねえ。君なんて言うの？僕、栗柄八迫。よろしくね。」

握手をしようとした手を、その子は握り返してはくれなかつた。

「ぼ・・僕・・・桐原・・須藤。よろしく。」

まだ恥ずかしいらしく、桐原須藤と名乗つた少年は、もじもじしながら答えてくれた。

「ねえ。一緒に遊ぼうよ。」

八迫が話しかける。

「で・・・でももう授業が・・・始まっちゃうよ。」

須藤が行つた通り、言い終わつた次の瞬間、チャイムが鳴り響いた。

「ちえー。じゃ、また後でね。」

八迫はそのまま、自分の席にも出つて行つた。須藤はにっこりしてつぶやいた。

「僕の・・・友達。」

こうして栗柄八迫と桐原須藤の親友関係は出来た。

毎時間、終わるたんびに八迫は須藤の席に来てくれた。そしてたわ

いもない話・・・普通に友達としゃべることと変わらないことをしゃべった。たまに、八迫の提案で外で遊ぶこともあったけれど。

そつやつて毎日のほほんと過ぐしているつむに落第試験が始まった。落第試験とは、これまでの授業をいかに理解しているかを調べる試験で、これで五十点は取つておかないと、即落第だった。試験の結果は三日後に、教師によつて告げられた。

「まず、学年一位は、このクラスにいます。桐原須藤。満点。」

クラス全員から拍手喝采を浴びる須藤はどこか照れくさく、苦笑いしていた。

「栗柄八迫 八十七点」

この結果を聞いた八迫は眉間にしわを寄せ、唸つた。

「うーーーーー ぬつづつづつ。」

八迫が唸つてゐるのを須藤はみて、いや、全員が何でそんな真剣な顔や、不安な顔になつてゐるのか、須藤は分からなかつた。自分が賢いんだと言うことも何も・・・。

BLACK/IN/THE/SKY（後書き）

八迫は一度閉じた日記の次のページを開く。そこにかかれていたことは、初の喧嘩だった・・・？

RED／OUT／THE／BLACK SKY（前書き）

栗柄ハ迫は、桐原須藤の切り裂きジャックを抜けるのを阻止しようとしていた。亮祐は、一足先に来ていたが、須藤を止めるることは出来なかつた。残る術はただ一つ。栗柄ハ迫が桐原須藤を止めることのみ・・・。

桐原須藤を、ハ迫は止めることが出来るのか？
切り裂きジャック番外編、第二話は須藤のジャック抜け！

屋根の上、八迫は、須藤の前にいた。

「何でなんだよ！ 何で町をこんな田ごと。今すぐ止めろ。」

須藤は笑つて答えた。

「ははは。僕はこのジャックが不良品だったことに腹を立てているんだよ。つまり、これを作りよりによつて僕に渡した協会を・・・

町を。」

そう言いながら須藤の田は笑つていなかつた。

「ねえ八迫。何で君のジャックは活きているの！ 僕のではなく、君のがつ！」

そこには憎悪に煮え返る須藤の顔があつた。八迫はその顔を直視できぬ。

「それ・・・は・・・」

須藤は空に田線を変えてしゃべりだした。

「僕は切り裂きジャックの試験、全部一番だつたんだよ？ それが途中で君たちが這い出でくるから・・・。だから僕に不良品がわたつたんだ。だから僕は、君たちも恨む。栗柄八迫と、中片亮祐の二人もつ。」

須藤は八迫の後ろでボロボロになつた亮祐を指さしていつた。

「八迫。君も直ぐに病院送りにして上げる。僕と君の差を見せつけてあげるよ。」

八迫はやつとの思いで口を開いた。

「逆恨みじゃねえかよ。」

須藤は八迫の顔面に思いつきり拳をたたき込むと答えた。

「ああそっさ。逆恨みさ。でもその逆恨みで俺はこの町を燃やしているんだ。ふふうふふ。」

ハ迫が屋根の上を飛んでいった。亮祐の真上を。亮祐はさつきから立とうとしているが、たてないままだった。ハ迫はふらつく足で須藤の元へと言った。自分が須藤を捕まえられる信じて。

「須藤っ！ やめろおおおおおおおお。

ハ迫は拳を付くつて須藤に向かつていった・・・。

「ハ迫。貴様も出番は終わったんだよ。亮祐とともに。」

須藤は特殊能力を使ってハ迫を襲おうとかまえた。

「これで幕を下ろそう。栗柄ハ迫。我が親友。カルボーネ・エカスタン！」

辺りは光で包まれた。亮祐は屋根で横たわつていて、ハ迫も、また屋根で横たわつていた。

須藤はハ迫の横で立つていた。右腕は肘から先がボロボロで、傷だらけだった。ハ迫の真横には、須藤の血だまりがあり、ハ迫の髪をもうすぐで真紅に染まられそうなほど直ぐ近くに流れ出していた。

「中片亮祐、栗柄ハ迫・・・。」

そうつぶやいた須藤は奇跡的に無傷な左手でズボンのポケットから、生徒証明書を落とした。

「開け、靈道。」

須藤は道を造ると切り裂きジャック予備校地区の一つの屋根から姿を消し、切り裂きジャックからも、抜けた・・・・・・・。このことを中片亮祐は知らない。

次の日の新聞は切り裂きジャック予備校半壊！犯人は孤高の天才桐原須藤？

元切り裂きジャック桐原須藤は、闇へと消えた。

ハ迫は病院で、相部屋の亮祐に言つではなく、誰にでもなく、つぶ

やいた。

「須藤・・・・。」

亮祐は、それを偶然聞いてしまった。

「栗柄八迫、中片亮祐・・・・。僕はお前ら一人を許さない。僕はお前らを殺す・・・。」

闇の縁で休養中の桐原須藤は、瞳を閉じて、つぶやいた。

RED／OUT／THE／BLACK SKY（後書き）

次回は桐原須藤、切り裂きジャックから抜けた心境を綴る・・。

SKY/DRIVE/IN/UNDERSTAND (前書き)

満月の深夜、異なる場所で、三人の人間が同じ行動をした。

SKY・DIVE・IN・UNDERSTAND

SKY・DIVE・IN・UNDERSTAND

桐原須藤は、満月の光を浴びて、考える。自分が切り裂きジャックを抜けてからのことを。あれからハ迫は、竜太という伝説の切り裂きジャックかもしれない奴を連れてきた。名刀の中の名刀をもこえるという、龍魂剣までもつて。

「そこまでして、僕を救いたいのか？きみは。」

栗柄ハ迫は、満月の光を浴びて、考える。須藤が切り裂きジャックから抜けてのことを。あれから須藤は、闇に手を染めた。自分や、亮祐には手出しが出来ないとこうにいるのかもしれない。それでも・・・。

「そこまでして、闇から身を引かないのか？おまえは。」

異なる場所で、二人の人間は同じ行動をした。自分の左胸を押されて、下を向いたのだ。

そして、

「もし、まだ向かってぐるならこれを使わなければいけないかもしない。」

異なる場所で、二人の行動は、つながっているかのように同じだった。

異なる場所で、同じ行動をするものは、さらに一人増えた。

「ハ迫。お前はどこからどこまで知っているんだ・・・。そして須藤。俺達は・・・そんな関係だったのか？」

中片亮祐は上を向いて、つぶやく。

異なる場所で、三人の人間は同じ行動をした。右手で、目を覆つて視界に何も映らなくしたのだ。そして、「どこまでが本当なんだ？」

異なる場所で、三人の行動は、つながっているかのように同じだった。

そして、ここで、三人は、全く違うことを一度だけした。

「八迫、亮祐。」

「須藤、亮祐。」

「須藤、八迫。」

自分ではない自分の頭の中で考えている人の名前を口にした。それからまた、三人は、同じ行動をした。右手で屋根、もしくは、崖に掘まり、下のテラス、もしくは岩におりたのだ。

三人は、それぞれちがう行動をした。

須藤は、右手を上に。

八迫は、左手を上に。

亮祐は、両手を上に。

それから三人は再び同時につぶやいた。

「我ら、永久なる親友なるものなり。この絆、なんときもたちきられん。」

それは、学校に行っていたときに決めた、印だつた。
そして三人は同時に手を下げた。

「しかし我は、その絆にひびを入れてしまつた。」

三人はそうつぶやくと、涙を拭つた。

異なる場所で、三人の人間が、同時に一日を終了した。
明日もまた、異なる場所で、三人の人間が、同時に朝を迎えるだろう。

「我ら、友情永久なるものなり。」

異なる場所で、三人の人間が寝言を言った。

SKY/DIVE/IN/UNDERSTAND (後書き)

三人の夢は、学生時代に留まっていた。

BLACK/OF/RED AND BLACK(前書き)

RED・AND・BLACK) 一つの色で編、ついにクラスマックス!

桐原須藤と栗柄八迫の初ダンジョン、別名暗黒の谷のクエストは成功するのか?そして桐原須藤の切り裂きジャック抜けの本当の意味とは・・・。

BLACK/OFF/RED AND/BLACK

BLACK・OFF・RED OUT・BLACK

八迫は、遠い空のかなたにいるはずの須藤を思つた。そして、本を開く。

それは友と友が粗そう物語だった。

八迫は途中で読むのを止めた。読まなかつたのではなく、読めなかつたのだ。自分と、須藤のように見えて。

須藤は、遠い空のかなたにいるはずの八迫を思つた。そして、本を開く。

それは、友を殺す復讐劇の話だった。

須藤は読書が得だつたので速読法をつかつて十分ぐらいで読んだ。

亮祐は、趣味の料理を作つていた。悶太の誕生日だったからだ。紙をみて、悶太から注文された料理の数々を作つていく。その姿は、様になつていた。

そんなとき、リストの中にある料理名を見つけた。

「ローストチキンのあぶり照り焼き」

それは、八迫とともに領すが、須藤が逆襲する前日に食べた物だつ

たからだ。

「須藤・・・・・。」

亮祐は、今でも信じられない。あれが本当に自分の知っている桐原須藤なのか・・・・・。

亮祐は料理を作る中で・・・・・ローストチキンのあぶり照り焼きを作る中で、考えた。自分が、八迫と、須藤に出会ったその日を。

確か、小学三年生ぐらいだったはず・・・・・。

「皆さん、こっちを向いて。今日から転校生が入ります。中片亮祐君です。」

仏頂面で、亮祐がクラスにはいる。

「中片亮祐です。」

亮祐は、入ったとたんに八迫の方に顔を向けていた。

「中片亮祐。」

「誰だ、お前。」

八迫が三白眼でにらんで答える。

「いや、お前のほうが誰だよ。」

思わずつっこみでしまった。

先生は、黒板をたたくと、黒板が半回転して裏向きになつた。

「あんたら、静かにしないと、この百乱刀^{ひゃくらんとう}で叩き斬るわよ。」

八迫をこえる三白眼で、一人をにらむ先生。

「は・・・はい。」

二人の息はぴつたりで返事をした。

「じゃ、八迫。須藤と一緒に亮祐の面倒でもみてやってね。」

先生は、百乱刀を八迫の首筋に当てる言つ。

「ふあふあふあ・・・ふあい・・・・・。」

首筋に冷たい物が当たつた八迫は恐怖で答える。

「はい。」

さつきから本を読んでいた須藤が本に集中し、反射神経だけで答え

る。

「まあつ・・・・・誰が他人の世話なんかになるかよ。」

八迫の首に付いていたはずの百乱刀はいつの間にか亮祐の首筋に早

卷之三

先生は無言で百乱刀を当てる。

卷之三

卷之三

生徒の誰かが小声で隣の友達に言つた。

「なあ。先生前は百乱刀じゃなくて、略乱刀だったよな……」
そう言つた生徒の首筋こもまた、百乱刀が当つてつていい。

「プライバシィよ。プライバシィ。」

一
は
い

「……………」三人は同時に反響した。

亮祐はその部分を思い出して、背後にあの先生がいたような気がして身震いした。

八迫は思つた。
須藤も思つた。
亮祐も思つた。

「あのマティーナム先生は怖かつた・・・・！」

その直後、三人の背後にまた、あの寒気と、首筋には冷たい感触があつたような気がした。

BLACK／OF／RED AND／BLACK（後書き）

番外編第一部、次回完結第一部切り裂きジャックの一週間【仮】
お楽しみに

FIRST / MISSION (前書き)

これは、須藤が切り裂きジャックを抜ける直前から。そこから始まる。

FARST / MISSION

FARST / MISSION

八迫と須藤は、洞窟の入り口にたつた。

「ねえ。八迫。絶対こここの伝説の秘宝、龍魂剣、龍銀剣を持ち帰ろうぜ。俺達一人で・・・な。」

八迫はエンブレムコーヒー リットルペットボトルの蓋を閉めて、答えた。

「お前が龍魂剣だからな。伝説の切り裂きジャックになれよ。」須藤は照れ笑いをしてうなずいた。

「さ、もう行こうよ。」

二人は、暗黒の谷の中へ、足を入れた。

「汝は何のためにきた？吾は渡さない。汝等は直ちにこの暗黒の谷を立ち去れ。さもなくば、全力で、排除する。これは主の・・・シヤガンの最後の頼みである。立ち去れ。」

須藤が言つ。

「僕たちは、暗黒の谷へ・・・この地に、龍の剣をもらひにきた。」何かの声は再び脳内に話しかけてきた。

「立ち去れ。立ち去らぬと言うのならば・・・死ね。」

その声が終わると同時に、いないはずの者、翼竜が、おそいかつてきつた。

『へんしーん。』

八迫と須藤は一人して、翼竜にかまえを取つた。

「無駄だ。カオス・ファイア。」

「八迫は右を。」

須藤はそう言つて左に飛んだ。

ハ迫は右に飛んで、基本技を繰り出そうとした。

「カオス・ファイア・バーニング！」

翼竜は顔の向きを変えてハ迫をねりつた。

「危ない、ハ迫！」

須藤は森で拾つた枝を思いつきり投げた。ハ迫めがけて。

「フンニコウゲ。」

ハ迫は飛ばされて、炎に当たらずにするんだ。

「ハ迫。ダブルビームだ。」

「OK。」

ハ迫はビームの構えを取つた。

須藤はビームの構えを取つた。

「ダブルビーム！スペシャル。」

「ぐきやおおおおおおおおおお。おのれ。竜の剣は、決して渡さないぞ。」

「…。」

翼竜はそのまま消えた。

声が聞こえてきた。

「ならば、山のように出してやる。」

サイクロプスや、ミイラ等、伝説の者ばかりを出してきた。そのうち、須藤のジャックから火花が散りだした。

「やばい。須藤、変身を止める。」

「ハ迫…。へんしーん。」

須藤は変身してしまった。

バチバチバチイッ パンツ

凄い音を立てて、須藤のジャックは壊れてしまった。

「ぐつ…。」

須藤ははじき飛ばされ、気を失つた。

「ふはははは。これで…。ぬ…。主、このものこ、元をゆだねよと。分かりました。主の言つことならば従いましょう。」

剣は、でてきた。残っていたモンスターが運んできて、須藤の前に

置いた。

「吾を持ち、願いを叶えよ。」

「ふふふ。そう言つことか。行くぞ。竜魂剣。」

須藤は竜魂剣になおしてもう一つ目覚めていた。

「須藤・・・須藤――――!」

八迫は叫んだ。

「ふふふ。八迫。僕は素晴らしい闇の力に惚れたよ。だから僕は切り裂きジャックを抜ける。」

そう言つた須藤はジャックを片手でつまんだ。

「僕には不要な物だ。」

そう言つてジャックを壁に投げた。

「僕は君を・・・殺しに行くよ。栗柄八迫。」

まるで、あの須藤は須藤でないのかと思われるほどに変わっていた。

「じゃ、バイバイ。亮祐によろしく。」

切り裂きジャック世界協会

「桐原須藤が、切り裂きジャックを抜けた。これからは、手配書に載せておけ。」

一番のお偉いさんがそう言い残して別室へと消えた。

「はつ・・・須藤は・・須藤はどこだ・・・」

病院で目覚めた八迫は、隣でうたた寝をしている亮祐の首に手をかけて、揺らした。

「須藤はどこなんだー。」

病院に八迫の声が響いた。

FIRST / MISSION (後書き)

次回より、本編に記載の一文字悶太と中片亮祐の出会いを描く。
少時の二人の出会いとは・・・。
幼

今の少年と青年の関係はここから気づかれたんだ。

親がそういったとき子供は聞いた。

それからそれから？

親は笑って答えた。

彼らは有名な切り裂きジャックになつて、世界を歩いたんだ。

壱 山道捨子 『マウンテン・ストリートチャルドレン』

壱 山道捨子
マウンテン・ストリートチャルドレン

木枯らしが、その日は山を吹いていた。

そろそろ山も暗くなってきた午後五時半。

小学生の亮介は、その山道を一人、急いで上っていた。

木枯らしの音に混ざって、何かの声が聞こえた。

声といえるかもわからない、たぶん声ならずすり泣くといったような感じだ。

亮介の背筋は凍つた。

この山にはあれがると噂されていたからだ。

白いはかまを着た、青白い顔で・・・。

じいやからはそれが出てくるから早く帰つてといわれている。それは子供を・・・小学生をさらうとしてた。亮介はばつちりその条件に当てはまつていてる。

亮介は気のせいが、木枯らしが声を出しているように聞こえた。

「オイデエイ・・オイデエイ・・・。」

そのうえ、山はやまびこを発しその声を何十のにもだぶらせて、帰してくれた。丁寧に。

亮介は震えた。

走つて山道を降りようとしたそのときだつた。

かささあああああああ・・・・・・。

風が吹き、草が道を出した。その道には、三、四歳の子供が、うつむき、座つていた。その子供の衣服は所々破けて、肌が出されていた。しかもつぎはぎだらけの服装。

その子から声が発せられていたと、冷静な判断が出来なくなつていて良助は涙目になつた。

亮介は疾風の「」とく、山道を下つた。

草が出した少年は、誰かいたのかと涙で赤くなつた目で、音がした
ほうを見たが、風が吹き終わり、道は見えなくなつた。

亮介は、屋敷でじいやに言つてみた。
じいやは笑つて付いてくれた。

山には、誰もいないということではなく、少年が、つぎはぎだらけのぼろぼろの破れた服で、泣いていた。

亮介は、じいやに頼んで屋敷につれて帰つてもらつた。

その道中、一度も少年は、口を開かなかつた。

ずっと、空氣を見つめていた。

「ねえ名前はなんていうの。」

亮介は亮介の同じぐらいのときに来ていた服を着たシャンプーのにおいがする少年に聞いた。

少年は、空を見つめ、静かに口を開いた。

けれどその口から言葉は発せられなかつた。

その頃の竜太といえば、テストの結果を見て親が頭を抱えているのだった。

● 山道捨子『マウンテン・ストリートチャレン』(後書き)

空を見つめた少年は、いつまでも空を見つめていた。
それを見ていた少年もまた、同じく空を見上げた。
少年には、少年が空を見ているように思えたから……。

二 亮介闇太（前書き）

少年は、空を見ないで、亮介のほうを向いた。

二 亮介悶太

二 亮介悶太

あれから一ヶ月、まだ少年は、一度も口を開こうともしない。その代わりに、亮介お坊ちゃんは、毎日熱心にあの少年の元へと、声をかけに行っている。

執事の黒坂は、毎晩、激しく暴れる、あの少年を抱きかかえ、入浴させている。お坊ちゃんに何かあつたら大変だから。清潔に洗わねばならないのだ。

「ねえ、黒坂、お父様、お母様、帰ってきたらどうしよう。」「最近、私にそういう、おびえている事がある。

お坊ちゃんの御父母は、一人そろつて別会社の社長であり、子供の事は、数年に何十回もない。けれど、御父母はそろつて不潔な小動物を嫌う。彼らから見れば、あの少年は負け組みで、不衛生な動物だろう。お坊ちゃんは、過去の経験から、それをわかっているのかもしれない。

「大丈夫ですよ。まだ、連絡はありませんから。」「

お坊ちゃんはにっこり、笑つて少年のいる部屋へと駆け込んでいった。

「ねえねえー今日はあつたかいよ、お外で遊ぼうよ。」「

ボールを持ったお坊ちゃんが部屋に入室なされた。

それでも少年は、言葉を一度も発せなかつた。

それは、私は、とつさの判断をした。

もしかすると・・・・・。中片家医療班を収集した。

「あの少年はもしかすると、虐待されていた可能性があります。直ちに見てください。」「

そういうつた私の隣でうつむいていたじいやが、うなずいた。

「だから、話せなかつたのか。」

亮介お坊ちゃんは、すぐに私たちの足元に来て、ズボンを引っ張つた。

「ねえねえ・・・あのこ、ビリしたの。」

心配そうに、田を潤ませて、聞いてくる。頬も、つるすりと赤みがさしている。

「大丈夫です。何でもありませんから。」

お坊ちゃんの田線で、そう答えると、

「何か、出来る事、ある?」

「・・・それじゃ、私たちと一緒に、クッキーを焼いて、あげましょう。」

亮介お坊ちゃんは、コクンと大げさにうなづくと、自室に、エプロンを取りに走り去つていった。

「やはりあのこは、虐待を受けていました。」

班長が、お坊ちゃんがいなくなつたのを確認して、言つた。

「治るか?」

班長は、うなずいた。

「ただ、カウンセラーが・・・。」

「亮介お坊ちゃんがいらっしゃる。大丈夫だ。」

「ねえ黒崎。まーだー。」

キツチンから、顔を出して亮介お坊ちゃんは、聞いてきた。

「えつと・・・じいやさん。」

「わたしは、あの少年といふから、お坊ちゃんを頼みましたよ。」

クッキーが、出来た。

「入つてもいいですか？」

音感のある声で、入室許可を取つた。

「お坊ちやま、どうだ。」

あの少年の変わりに、じいやが答えてくれた。

「入ります。」

お坊ちやまが入ると、少年はお坊ちやまの持つていてる袋を見ていた。

「なあに、それ？」

それは、虐待を受けた少年が、きりんと答えた、はじめの一聲だつた。

これまでの少年の語りかけで、やつと、心を開いてくれたのかもしない。

二 亮介悶太（後書き）

これからが、お坊ちゃんとして少年の一歩である。

三 少年悶太（前書き）

次回、亮介、悶太編クライメックス予定。

三 少年悶太

三 少年悶太 ユーネームイズモンタ

今日は、あの少年の誕生日らしい。亮介が、自分のプロフィールを明かしたと同時に少年にも聞いたからだ。

「ねえ。お名前はなんていうの？」

一 懇太
· · · · ·
— 文字懇太

少年は「…………」
懶太は「…………」
さりとて

「ウリバニ。

أَكْثَرُ
الْأَنْوَارِ

「ねえ悶太、これ、僕からプレゼント。」

箪笥二つ分の大きな包みが、悶太に渡された。

悶太は首をかしけた。

「あけてみてよ。」

亮介は、この笑みと、うれしさを心に蓄えた。

愚方は ぬごくことその篇をあげた

悶太は、見えなくなつた。

亮介はプレゼントを搔き分けて、伸びている悶太を救つた。

「あり・・・がと・・・。」

といつては、亮介には伝わり、とても、うれしかつた。

「これ、これからここで暮らすのに必要な服とか、筆箋とか。僕の部屋の隣なんだよ。いい。」

亮介は、悶太を何とか背負うと、部屋にかけていった。

「その荷物、持ってきてー。」

背負われた悶太は、人のぬくもりを、体で感じた。

次に目覚めたとき、悶太は、自分の部屋という場所で自分だけのベッドという物で寝ていた。

悶太には、それが何か、わからなかつた。

廊下に出て、自分の部屋という場そのドアを見ると、ひらがなで、

もんたのへやと、手書きで書かれていた。

悶太は、涙で、何が何だかわからなくなつた。

少年は、悶太と名乗り、亮介と、親友になつた。

三 少年悶太（後書き）

次回、亮介、悶太編クライマックス予定。

四 閻太亮介共同生活（前書き）

閻太編、完結

四 悅太亮介共同生活

四 悅太亮介共同生活

それから、何年かがたつた。

悦太は明るい元気な少年になり、亮介は、中学校に上がった。数年たつたある日、悦太は亮介の事を主人と呼ぶようになつた。それから、切り裂きジャックとしての試験の日が現れた。

「んん・・・・・。」

もじもじしている悦太に、亮介は、頭をなでた。

「やれることをすればいい。頑張って、試験に挑めばいい。それで、私の部下となれる。」

悦太は小さい声でつぶやいた。

「はい。」

一度目の試験は、落ちた。

二度目は、受かった。

「良かつたな。」

切り裂きジャックの受験は毎日出来る。しかも問題等はほぼ同じだ。一点足らなかつた悦太はつづきの日に受けたら、合格できたという事だった。

「良かつたな。」

もう一度、亮介は悦太に言つた。

「ありがとうございます。」

「今宵は、合格祝いに何かほしいものはあるか。悦太」

悦太はしたを向いて、つぶやいた。けれどそれは、もうえるはずの

ないものだった。

「・・・・。」

それは、もらえるものではなかつた。

「それが本当にいいのか。」

亮介は、背中を向けていつた。

「今日は特別だ。次はないぞ。」

「はいっつっつっつ。」

亮介は、特別にほしいといったもの以外にもそれらの系統のものを
買い、送つた。

それらは日曜の朝七時半にやるものグツツ、合体機械だった。

それからかなりの間、部屋で、遊ぶ悶太の姿が見られた。

歳にあつた少年の姿だった。

それから、数日後、亮介の事を、悶太は亮介と呼べるよつになつた。

四 閻太亮介共同生活（後書き）

次回からは、何にしようかなー。

新年の1冊挿（前書き）

明けましておめでたございます。新年一発目小説ですよー。

新年の「」挨拶

舞台の幕が上がった。

上がった底には、竜太を筆頭とする切り裂きジャックの姿があつた。
しかも着物での登場。

「えつと、明けましておめでとひざむこます。今年初のジャック番
外編です。」

竜太が。

「これからも僕たちは、地道に活躍できるようにがんばるよ。僕も
全力でがんばります。」

竜太。

「これからもがんがん、この七の貧弱切り裂きジャックをしばいて
いきたいと考える所存であります。」

ハ迫。

「そして、はやく仮面の代金編を終わらせて、新章海上舞踏会と真
石版編をはじめないと考えております。まあ、新章がこれかはわか
らないけどね。私はこれがいいと思つてんんだけどね。」

理緒。

「とにかくこれは、一体いつになつたら終わるんだよ。文字数が多
いと、長すぎて読まない人もいるぞ。そろそろ第一作品目に分ける
のもいいんじゃないか。それに、第一シーズンって一体いつ
まで続くんだよ。もう話数が結構言つてるじゃねえか！」

亮介。

「これからも、この切り裂きジャックをよろしくお願ひします。」

「 そういえば、切り裂きジャックってさ、何処が切り裂きジャックなわけ。別にこれ单なるヒーロー物でも良いんじゃないかと思うんだナゾ。一本切り裂きジャックここだわる意味つて可。」

「理緒さん……。答えられないよつな」とをまた・・・。

「ほひやつぱり、作者も書つてんじやないか・・・・。つて! いつ

「ウルセエ。竜太。エンブレム投げつけんぞ・・・・。」

竜太が、創造で、大量の嫌がらせセットを出した。

「うめ……の場所や、やべながこじり……。」

舞台はじっこ

「そんなこんで、新年浮かれてるね。」

「まあ誰も宣言しないよつだし、宣言しと二つか。」
悶太がわため片手に亮介と被害を避けながら話す。

『そんなこんなで、切り裂きジャックを今年もよろしくお願いしま

す
！

「…あんなところで、勝手に宣伝終わって…あ…、幕まで下ろ

すな・・・・まだいいたいことがあるのに・・・ちよ、嫌、まつて・
・・・ああー。」

今年もよろしく、切り裂きジャック。

次回からは約束していた『誰とー?』 短編をお送りします。お楽しみに『誰が楽しみにするんですかー?』

そういえば、さつきから話してゐるあなたは誰ですか？

闇太と秘密の地下の部屋ー（前書き）

これは、授業中にノートに書いたものです。

祝日のところが、運動会だった事から、そこの人の季節かもしれませんね。

数学のノートに書かれたこの短編はノート一ページだったのに改めて書くところが多くなりました。これじゃ、本編一話より長いか短いか同じくらいじゃないんですか？という自己質問に自分で答えられない私が少し恥ずかしかつたりするのですが。まあ、気にしないで読んでくださいね。

ちなみに後四話ぐらい残ってますよ。数学のノートに一話。別のノートに一話。

閻太と秘密の地下の部屋！

閻太と秘密の地下の部屋！

あるところにある、切り裂きジャック本部で一人の少年閻太が決して入ってはいけないと言われている地下の部屋がありました。ある日、とても暇だった閻太は、とても親しい亮介に聞きました。「ねえ、何で入っちゃいけないの？」「どう聞きました。

けれども、そのときの亮介の答えは、

「入ってはいけないのはとっても危険だからだよ。」

という答えでした。

その後、八迫、理緒、役に立たないだろうけれど一応竜太と、聞いてみました。けれど、その答えはほぼ同じでした。

けれど、竜太からの答えは、何か裏があると思いました。
「な・・・なんにもなかつぱらがつたよう・・・・。」

冷や汗だらだらで、竜太は答えてくれました。

そして走り去つていった後に小さな水溜りが出来ました。それを見て、閻太は決心しました。

今日こそは入つてやると！

しかし、閻太は眠いので寝てしまふのでした。
けれども今日は違います。明日は祝日だから、遅くまで起きているのです。

昼寝もたっぷりして、夜に備え、夜に挑みました。

そして夜です。

給仕室に潜んでいた閻太は誰かが入つてくるの音を聞き、机の下に隠れました。

そして、冷蔵庫の扉が開きました。

ハム、チーズ、燻製卵が消えます。

そして、牛乳が減りました。それは八迫の牛乳でした。

「つぶはーつ！」

それは八迫の声でした。

「やつぱり、牛乳も、エンブレムだなあー。」

それを見ていた悶太が心臓が耳の穴、毛穴から、氣色悪く出て行かのように緊張しました。

見つかってしまったら……。

そんな心配をする悶太を他所に八迫は出て行こうとして入り口で脚をとめました。

「早く寝ないと、お化けが来ちゃうかもしない！早く寝なきや、怖いいいいい！」

かなり棒読みでしたが、悶太にはそれだけで十分でした。

大好きな亮介の次にお化けが怖い悶太は、かなりの涙目です。

「ああれえー・・・・・・オバケー。」

八迫がまるで連れ去られたかのようにふわっと消え去りました。悶太はついに半泣きでそして亮介の部屋に向かつて走り去つていきました。

そして亮介の部屋に強引に入り込む、亮介をたたき起こうとして言いました。

「亮介、一緒に寝てもいい？」

たたき起こうされた亮介は寝ぼけ顔でうなずいて、枕に倒れました。

中片亮介、ついに崩御！

こうして今日も悶太は眠気と恐ろしさに負け、地下へといけなかつたのでした。

そして、地下室では……。

「やつたねえ。ハ迫。」

リオが燻製卵を頬張りながら微笑みます。

「良かつたねえーあはははは。」

竜太が笑いました。しかしハ迫は手で机を叩きました。

「そんな事はいい。ひとつとこの問題を解きやがれ、こんなにやうづ。

」

この地下は、理緒とハ迫が竜太の勉強を見たり半殺しにしたりする勉強拷問室だったのです。

まだ、決して馬鹿ではない、可能性がある悶太に、この部屋は、まだまだ早すぎる、秘密の部屋なのでした。

終わり。

悶太と秘密の地下の部屋！（後書き）

次回予告

次回は、悶太がまだ知らぬ、もう一つの部屋が地上にあつた？そして亮介が、ついに逆襲に出た！

悶太は亮介の逆襲を避け、秘密の部屋について知る事が、はいることが出来るのか！

驚け！呪いの部屋！

「もう」期待！
誰かしてくださいね。

驚け！呪いの部屋！（前書き）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

恐ろしい話の始まりです。

驚け！呪いの部屋！

驚け！呪いの部屋！

亮介に懇太が頼みました

「ねえ！」この知らない言葉を教えてよ」「なぜこんなことを言うかって、それは、本部

ヨーダーにあつた本部の地図にはまだまだ悶太の知らない部屋が乗つていたのですから。

「んー、じゃ、また今度ね。」

それは、先週言わされた事とまつたく同じ事でした。

尖らせました。

「へつぞう」コロボーへ「コロボー」

悶太はじたばたと手足を振りまくりました。

そこで亮介は一つの部屋の存在を思い出します。

精一杯脅かしたつもりでしたが懇意はけろりとうなずいて言いまし
た。

「うん」

亮介はジャックの電源を通信に変えて、総員に伝えました。

「P-177の操縦に入ってくれ。」

「了解。」

総員、配置に付きました。
これで準備は万端です。

「ね、亮介ここなの？」

亮介は悶太の手を引いてP-177の部屋の前にいました。

「そうだよ、悶太。」

亮介は思わず顔が二マニマしてしまいます。それが気づかれないか、内心はらはらです。

「COME・ON COME・ON。」

八迫がジャックに通信してきました。

「いいわよーん。」

理緒が、ぐぐもつた声で。

「ふー」あからばなはらでつぼーう。

もはやいみふめいです。

亮介がドアの中に悶太を招き入れ、閉めました。

「ぎやう！な・・何するの？亮介？あつ！嫌！」

その声は後半、泣いています。

「秘密の部屋、隠された部屋なんてものはない！わかつたか？」

亮介が叫びました。

亮介には見えないのにうなずいた悶太。しかし、下半身どころか全身に何かが乗つかっています。もう、なきまくりです。中で、かなり襲われている悶太でした。

その日を境に、悶太は、秘密の部屋、隠された部屋について一切聞かなくなつたのでした。

驚け！呪いの部屋！（後書き）

次回予告！

竜太に勉強を言いつけたハ迫、理緒はどこへと消えた。後をつけしていくと、そこでは恐ろしい計画が、亮介含む三人によつて行われていた！

竜太は、その計画をとめられるのか！

黙 File 竜太

乞うご期待してくださいます。

巻File竜太（前書き）

前回より短くしました。

あと、時間軸的には短編一個目の前ですね。すいません。時間ばらばらで。許してください。

賤 File 竜太

賤 File 竜太

「おい、竜太、これやつておきなさいねえ・・・。」

八迫がエンブレムコーヒーを飲みつつ、山のよつたドリルを竜太の目の前に置いた。

「うふえー・・・・・ん・・・出来ないよつー。」

竜太が泣きべそをかきました。

「あそそうそ、私からの贈り物。どうぞ、今から終わらせられるだけ終わらせやがれ。」

怪力の拳を作り、リオは言つた。

そして、二人はどこかへ消えた。
このところ、ずっとああなのだ。

竜太は心を決めた。

今日は尾行すると。

そして、二人は、あるところにたどり着いた。

そこには、三人分の机があり、そして、書類があつた。

「では、これより、七の切り裂きジャック平田竜太の賤計画書の説明をする。」

司会の亮介の言葉で、二人は書類の一ページ目を開く。

「まず、一に竜太の食生活、朝食べず、昼やけ食い、夜少しに夜食山のように食べるその食生活を改善するために。です。やめさせるために縄で縛り付けます。」

「二人がはいと呴く。」

「次に、眠る時間が少なく寝坊してばかりの竜太のために夜十時に

は布の中に入れ暗闇に放置します。」

理緒が呟くのを、竜太は聞き逃さなかった。

「いいですねえー。」

亮介の書類を読み上げる事は終わらない。

「次に、上手に用を足せるようにマイコアルを作り……。」

「それはイラねえだろ。」

八迫は思わず突っ込んだ。

「最後に勉強させるために地下の勉強拷問室を使います。」

それが終わらぬうちに大きく反対が出ました。

「計画中止だー。」

泣き叫ぶ竜太でした。

「実行！」

八迫が叫びます。

亮介が、多数決により決まつた決定の判子を書類に押しました。

「決定につき、実行。」

竜太の恐怖はまだ終わりそうにありません。

謎File竜太（後書き）

次回予告！！

夜、夢を見た。竜太は。それは、ベッドで隠された人一人分の穴で
した。

そこに待っていたのは謎の声！
一体何なのか！

竜太と後ろの正面腐乱死体？
ソンビーズ

竜太と後ろの正面腐乱死体（前書き）

そういうえば、悶太の悶つて書つ字つて身悶えるとかのときに使うやつだつたんですね。知らずに名前に使ってました。変えたほうがいいのでしょうか。どうなのか、悩んでます。

竜太と後ろの正面腐乱死体

竜太と後ろの正面腐乱死体？

竜太はその日、夜十一時に寝ました。
すると不思議な夢を見ました。

そこは本部で割り当てられた竜太の部屋。

そこに、竜太は一人で立っていました。‘ふと、一週見ると、ベッドで隠された先に穴があります。人間一人分の穴です。

首を傾げた竜太はベッドをどかし、入っていきました。

そこは暗闇でした。

たまに音がするだけで、後は、無の世界。
三十分は進みました。

いつの間にか、自分の入ってきた穴もわからないほどにまできました。

そして、遂に、無がなくなりました。
それは、突然現れました。

「ねえ、竜太、こっちに来てよ。」

その声に、竜太は驚き、お漏らししてしまった事は、宇宙規模での秘密です。

それはさておき、その声のほうに腹ばいで進みました。

「そっちじゃないってばあ。こっちだってばあ・・ぐひえひえ。」

その声に竜太は従いました。

「あひよ、竜太来ててくれたんだ。」

暗闇から、その声の主は出てきました。

それは大きもあり、小さもある不思議な肉片だった。

「僕たち、仲間がほしいんだ。僕はゾンビのランケン。」

そういうたランケンは竜太に噛み付こうとしました。ランケンだけではありません。そのほかの仲間たちも山のように出てきて竜太を噛み付こうとしています。

そして右手の小指を、かまれてしましました。
竜太は絶叫して、気絶しました。

そして、竜太は現実で飛び起きました。恐る恐る小指を見ると・・・

同時刻ー本部ー

白い実験服に身を包んだハ迫はパソコンにデータを打ち込みました。ファイルの名前は、平田竜太全実験書類そして、その右下に残り計画数。

その傍らで、エンブレムコーヒーを飲みました。

「次は、これかな？」

クリックボタンは、押されました。

その世、再び恐怖は舞い戻り、闇夜を引き裂くような大音量の絶叫が響くのでした。

竜太と後ろの正面腐乱死体（後書き）

次回予告。

亮介は、書類整理にそれを見つけた。

それは一人の女性がたたた一人で起した戦争にしてのレポートだった。

それを見た亮介は苦々しく思い出す…………。

とうとうノートに書かれた短編小説最終回『今現在』！
一月一日過酷戦場報告書也

寂しいメロディーが、今、戦場に響き渡る・・・。

一月一日過酷戦場報告書也（前書き）

とうとう、彼女は戦場へと旅立つていった。

一月一日過酷戦場報告書也

一月一日過酷戦場報告書也

土曜日早朝、彼女は出かけていった。

電車に乗って

船に乗って

飛行機に乗つても

正確には電車一駅分乗つて彼女は、戦場へ行きました。

そして、彼女・・・理緒は戦場へ脚を滑り込ませました。

店が開きました。

目指すは三回の戦場バーゲンでした。

並んでいる人の行く先は全員一致していました。

そして、波にさらわれるよう理緒は飲まれていきました。

つめ放題の戦場です。

中ではオバちゃんが絶命したかのように叫び狂っています。

「ちょっとあんたーねー、その服は、あつたしがとつとたんやけど
にえ・・・・てえ、はなさんかいいいいい！」

その声を聞いた理緒は戦場は後ずさりしました。

「ちょっとどきなさい！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

後ろからオバちゃんがラリアットをして襲い掛かってきました。

間一髪よけた理緒はオバちゃんにドロップキックで応戦しました。

そして遂に戦場で戦いました。

戦果は上場でした。

両手にこれでもかとこづけりの紙袋を持つた理緒はやつと本部へと・・・。

【新年地獄福袋＆詰め放題】

やつと本部へと・・・。

「こづくわよーう！」

やつと本部へと・・・。

理緒は駆け出しました。

夜やつと帰宅した理緒はトラックを亮介の名で引き連れて帰つてきたのです！

「まだまだ行くわよー！」

かすかに引っかき傷がある理緒は駆け出しました。

新年だけの特別な・・・。戦場へ！

一月一日過酷戰場報告書也（後書き）

次回予告

未定

ジョンソンなつかしの部屋掃除ー（前書き）

この作品はあるの、ノート作品ですます。
登校したのは二円ですが、ノートに書いたのは一円十三円、金曜日
です。
にやつ。

十三日の金曜日です。
ジョンソンズティーです。

とこつわけで、ジョンソンのシロでのひと時をお楽しみください。

ジョイソンなつかしの部屋掃除！

ジョイソンなつかしの部屋掃除！

彼の名はジョイソン。彼は十三日の金曜日、自分の部屋を客観的に見てみました。

汚いのです。汚いのですます。かなりを超えて、めつさ。

「これは、掃除しなきゃ。」

ジョイソンはポツリとつぶやくと、何処からか、ゴミ袋を出してしまった。

前に掃除したのは前回の十三日の金曜日。何年前でしょうか・・・。本来カーペットがないその部屋は、いつからか、埃がカーペットの役をしていました。

埃を、庭で焼き払いました。部屋の高さが変わりました。次に、ガラクタです。

竜太に破壊された装備一式。

そして小さい頃の布団に、

なくなつたと思っていた真剣。

思い出も同時にみがえります。

そして、ジョイソンの部屋は新品同様に輝きました。

その日、存在しないシロでは、掃除ブームが始まりました。その結果輝きすぎて、存在する城へと変わってしまいました。けれどジョイソンという彼は、飽きっぽい性格でした。

三日坊主です。

再び、存在しないシロへと。

「 もう、いいや。」

ジョイソンはひとつ、あきらめてしましました。

カレンダーは再び、あの口をさして・・・。

ただ、チーンソーだけはきちんと手元にあるのです。それだけでいいのです。

部屋の隅で小さくなつて寝るジョイソンは、ジョイソンだけのものです。

どうなるかと、それはジョイソンが決める事。ジョイソンだけの、シロなのですから・・・。

ジョイソンなつかしの部屋掃除！（後書き）

次回は、これまた三月三日前に書いた女性限定カーーバル、ひな祭りです。

まあ、女性、独りしかいませんけどねー。孤独。
孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独。
とにかく、次回作品、

三月三日はひな祭りでしょう？【仮】お楽しみに！

次回予告

カレンダーの日付は、三月一日をさした。
しかし、彼の女には、あるものがなかった。
ゆえに、悩んでいた。

そしてそこに現れる金持ちのぼんぼん、中片亮祐。
彼の少女、理緒は、亮祐に何をするのか！

そして、彼女の明日の祭りは！

切り裂きジャックは殺しません！外伝編第十七話
三月三日はひな祭りでしょう？

今、伝説は進化する・・・。

「田川の雑祭でじょうづ？」（前書き）

理緒、怖い。
饅頭、怖い。
お茶、怖い。
いろいろ怖い。

二月二日は雛祭りでしょうか？

二月二日はひな祭りでしょうか？

三月一日。一人の女性は、切り裂きジャック本部エントランスホールで悩んでいた。

彼女の名前は理緒。

彼女の今のところの悩みは一つ。

明日、三月三日のひな人間の数が圧倒的に足りないのです。これはいかんせん。

主役は、自分に悶太。ほかの男には任せられない。亮祐は・・・ダメ。私が今日のことがおぼえていられなくなっちゃう。

そんなところに来た冬の虫。

「や、理緒くん。」

間が悪すぎです。けいわいです。KYです。

理緒は脱兎のごとく襲い掛かりました。

「ジャーマンスーパークレエエエエクス！」

金持ちのボンボンを見事ジャーマンスーパークレエエエエクスで捕らえました。

「ほんだら！？」

「がためで！」

「はうううううーいたひ、ひだい！」

そして脳天ウルトラ怪力チョップです！

「ひな人間が不足しているの。」

「あぐう！だ・・・だから何ナノ？あげえうー何なんでござりますか？」

そして、亮祐を立たせてあげて。

「ドロップキィイイイイイイイイイイイック！」

ドロップキィイイイイイイイイック！で亮祐の鼻の皮をむき

ました。

「あんにやううん・・・・・・」

情けないです。死にかけです。

「に・・・・人間が足りないから何ナノ?ひでふうーぐれんーにる
ヴあーー!らがん!しゅ!」

途中の戯言は、理緒の理緒による理緒のための野望を実現させるために必要な事をさせるためのドロップキックによる悲鳴だとお考えいただいて、なんら間違いはございません。はい。まったくもって。真剣で切りかかつてはいませんよ。決して。

「人を貸してくれ。」

亮祐は理緒の手によつて縦に振られました。
氣絶しているからです。

そして・・・・。

三月三日 着物姿の理緒と、悶太がいました。ひな壇の上に。
そして五人林のBGM。

「ねね、悶太、どう?」

幼い悶太に理緒は、微笑みました。

「楽しい!」

そして、BGMがとまりました。

すると理緒がにっこり笑つたまま器用な事ににらみました。

BGM、再開です。

三人、女役で男がいました。彼らです。言わざと知れた。

「何やのん？亮祐。」

八迫は亮祐に・・・昨日の惨劇で死に掛けている亮祐に聞きました。

「何で女役なのさー。」

竜太がBGMを流しながら、泣きます。

「きょ・・・今日が、ひな祭り・・・だから。」

亮祐は倒れました。

『亮祐ー！』

竜太と八迫が亮祐に歩みましたが、お雛様が、それを制しました。

「きょーうは楽しいひな祭りーいえい！」

▽サインでカメラ目線の理緒に脱腹絶倒！

「五月蠅い・・・」

かんざしが首のつぼに刺さります。

「ああ！八迫ー！」

昇天。

明かりをつけましょ 雪洞に

お花を上げましょ 桃の花

五人林の笛太鼓

今日は楽しい

ひな祭り

来年もこの行事はあるのかしら。

二月二日は雑祭でじょうづ？（後書き）

次回予告

切り裂きジャックは殺しません！第一シーズンで大活躍した長谷川律子が、外伝で帰つてくる！

檻に寄せられた長谷川律子。

しかし、律子は脱獄した。

一人だけの息子に会うために！

律子に子供？

しかも、その律子の子供は、まさかまさかの彼？

長谷川の知られざる新設定で出来たまったく新しい短編、脱獄しました長谷川律子！【仮】

今、伝説は進化する・・・

今月も十二日の金曜日（前書き）

ノートシリーズです。

もう19話まで書いてます。

という事は、まだまだ楽しめるんですよ。

長谷川、狭霧花、ガルガンティア、理緒、八迫、亮祐、悶太、竜太。

まだまだ書きますよ。

そして、マリーネもいたな。

まだまだこれからです。

今月も13日の金曜日

今月も13日の金曜日

存在しないシロのジョイソンはチェーンソーを持っていました。
今回は、そんなジョイソンのチェーンソーに関するお話を。

今日もジョイソンは繁華街にいました。
光る、チェーンソーを持つて。そのチェーンソーは、血で、輝いて
います。

それはジョイソンの一つ目のチェーンソーでした。
そのチェーンソーを鋸付いて、そして、切れ味が悪いものでした。
もう、人を斬ることはできなくなります。

「このチェーンソーもまた、使えない……。
仮面を付け、その仮面もまた血で輝くジョイソンは悲しげに言いました。

「もう鋸付かない、永遠のチェーンソーはないものか……。」「
ジョイソンはつぶやくと、その繁華街から煙のよけに消えました。

13日の金曜日という本に……。

永遠に時を止めたチェーンソー13日の金曜日にのみ出現す。

13日の金曜日に13人の人間を血祭りに上げよ。呪いをかけ、わ
が名を呼ぶ。わが名はテス。さすれば、永遠のチェーンソー我が手
を離れ、新たな主の手にささげられん。

ジョイソンは12日の木曜日にその本を見つけた。

今日で捨てようと思ったチェーンソーを手に取ると、繁華街へと出

て行つた。

雨が降る繁華街。

無人の繁華街。

12人まで殺したジェイソンは、13人目が見つからず、頃垂れていた。

そして、無常にも時計の針は、12を指そと、動いた。

ジェイソンはとっさにチョーンソーで人を殺した。身近にいた人を。そして叫んだ。

「デュエッヘルヘルヘルヘルス！」

次の日からジェイソンという恐怖の殺人犯は現れなくなつた。

そして、ジェイソンは・・・。

13人目、自分を殺したジェイソンの右手にはあのチョーンソーが握られていた。

そして歩いていた。

一度死んだジェイソンの命とチョーンソーの命は共有となり、ジェイソンはチョーンソーを守り、殺すと誓つた。

そして自分と瓜二つのドッペルゲンガーがいるということに平田竜太という存在に気が付いてしまつた。

四人の人間を集めると、対抗組織、黒の切り裂きジャックを結成。

リインカネーション

輪廻転生

ジェイソンは一度死んだため、性格、口調など、さまざまな事が変わつた・・・。

今月も十二日の金曜日（後書き）

実は本編書き直して外伝編との関連性を持たせようとして本編書き直しました。アヒョ ヒョ ヒヨ ヒョ ヒョ ヒョ ヒョ ヒョ。誰か僕に、本買ってくれません？ほしいのあるんで。

今月もまた、十三日の金曜日ですね！

次回予告

ディア博士が死んだ後、どのようにしてガルガンティアは、地球の切り裂きジャック本部へと来たのか？そのなぞが今、明かされる・。

切り裂きジャックは殺しません！外伝編にガルガンティア、初登場！

ガルガンティア宇宙満漂機【仮】

もしかしたら別の書くかもしだせませんが。

ガルガンティア宇宙満遊機（前書き）

ガルガンティア、再来！

ガルガンティア宇宙満遊機

ガルガンティア宇宙満遊機

ディア博士が死んだ・・・・。

ガルガンティアは自分のいるところがなくなつたと思つた。
ガルガンティアは、目覚める際にエヴァーニュン・サーディーという
大量の波動を出した。

その波動のせいで、ディア博士は死んだのだ。

ガルガンティアのいる所は無くなつてしまつた。

このまま、エネルギー切れで宇宙を彷徨つゝミミになろう。
いつしかガルガンティアはそう考える様になつた。

そしてガルガンティアは万有引力で一つの惑星にひきつけられた。
大気で燃えた。

けれどそれも、ディア博士が守つてくれて、動ける。

何で？ 何でまだ僕は動けるの？

ガルガンティアは落ち込んだ。

僕は死ねないの？ 永遠に一人で永遠に寂しいの？

ガルガンティアは、目というところから機械らしからぬ涙を出した。
そして、その星の住民に出会つた。

ガルガンティアは、神と呼ばれた。

違う・・・。僕は神様じゃない。神様なら、家族を守れる。作つてくれた人を殺さない。

神様とまったく逆の固体。

しかしその住民は神と信じて疑わなかつた。

「神様。私たちを助けてください。僕たちは、切り裂きジャックに
ぼつこんぼつこんのいやーンにされたのです。」

その言葉でガルガンティアに搭載されたプログラムの一つが、改竄

された。

「わかつた。何処にいけばいい？」

ガルガンティアは、黒い服を着て、左頬に黒子のある少年に問うた。

「地球。僕たち、黒の切り裂きジャックを痛めつけた悪い奴ら。」

ガルガンティアはすべき事を見つけられた。

「わかつた。倒してくる。」

そのとき、ガルガンティアは自分というものを殺した。

自分という存在を。

「切り裂きジャック！」

そういうと空高く飛んで行き大気圏をも突破して。

しかし、切り裂きジャックの前にやるべきことを見つけた。

ディア博士の最初の依頼。殺すべき人。それを見つけたガルガンティアは、彼を殺した。

切り裂きジャック本部の前に来ていた。

ディア博士の作った正義三機体の初号機、ガルガンティアは正義の劫火を空へ向け、放つた。

そして、決戦を挑んだ。

これで、切り裂きジャックという奴らが強ければ、僕はディア博士の元へといける……。

そう、思つて……。

「これで、奴らは死ぬぞ。」

ジェイソンは高笑いして戻つていった。

ガルガンティア宇宙満遊機（後書き）

次回予告

少女は、うどんを食べたくなつた。三人の奴隸を召還して、うどんを作らせるのだ！

本格餃餃グルメ小説切り裂きジャックは殺しません！の外伝編に、

とうとう登場、餃餃王道物語

休日出勤！餃餃を造れ！【仮】

餃餃を極めし者は、わが身を極めんとす・・・。

そういうえば、長谷川の話しあつた。

休日出勤！餃鈍を造りつ（前書き）

本格餃鈍王道物語小説、ここに爆誕！
見てねハート。

休日出勤！餃餃を造りつ

休日出勤！餃餃を造りつ

「餃餃食べたい・・・。」

理緒のその一言でその日・・・日曜日は竜太、八迫、亮祐にとつて最悪の日曜日もとい恐怖デイとなつた・・・。

「ねえー 餃餃食べたい・・・。出来立てのー。」

会議がその日たまたまあつた本部で理緒は早速発言した。

「う・・・餃餃？」

何ゆえ餃餃なのだ。どこからいつ餃餃なので？

竜太の頭はクエスチョンマークで埋め尽くされた。

「じゃ、つくれば良いじゃねえか。」

八迫がつぶやく。

「回転ドロップキック！」

音速で回る理緒はそのスピードで頭に一撃加えた。アメリカで言つ、チップだ。サービス料だ。

「造つて・・・くれる？」

うなづくしかないのだ。そんな両手を開いて、今度は高速ラリアットなんかでこられてしまつては・・・。

「竜太ー。モット粉練つてね。」

「竜太、踏め。モット腰を入れて強く、コシが出るように力強く！」

「そこの一人、出汁造れ！」

女王理緒の言葉は絶対である。

そして、三キロもの餃餃を作らされた三人はくたくたでくたくたで・
・・。

悶太はその中に含まれてはいない。途中で、理緒サイドに引き込まれたからだ。

理緒は、悶太と二人で三キロの餡飴を間食した。もつぱり、理緒の胃袋に収まつたが……。

爪楊枝を口に入れ、おっさんと貸した理緒は、さつさつとやり、腹を抱えて次の任務を出した。

「来週は、本格釜焼きピザな……。」

「エンドレスである!」

影で見ていた亮祐お抱えの執事やらシーハやら……。

「お坊ちゃん。この私目に頼らざともあんなに立派に……。」

「ああ、亮祐様。最近このクックショフに何も頼まない……頼んでくだしゃれえ~」

見方もさまだ。

ほんかく うどん おうどん のべる
本格餡飴王道小説これにて完結!

休日出勤一、餃鈍を造りつ（後書き）

次回、長谷川脱獄ストーリー
でもそろそろ本編やらなきや忘れられちやつよなあ。いつものこと
こつちを本編に改造してあつちを・・・番外編に・・

脱走しましたW囚人（前書き）

これからきちんと書きます。
見捨てないで管謝意。

脱走しましたW囚人

脱走しました！長谷川律子

これが

本当の？切り裂きジャック

どんよりと曇つた鼠色の空が、女性を見つめているある日、それは監獄で起じた。

監獄の中である一人の女性は、脱獄した。

あの女性だった。

「私はこんなところでいられないのよ・・・。」

そういった女性は、ふと隣の監獄を見てしまった。

見てはいけなかつたのに。

その結果、隣の監獄にいた元校長の咲霧花は見捨てられた子犬の目で長谷川を見た。

「ぐう～ん。」

しまいには泣きまねまでした。

しかし田もくれずに、長谷川は走りました。己の欲望のために。

「私はこんなところでいられないのよ・・・。」

警備員さんが襲い掛かってきました。

美形のいけてるメンズです。

「ラリツアツトオオオ！」

警備員のイケメンは倒れてしまいました。

「ドロップキイイイイイイイツク！」

次々と。

次々と。

長谷川の通つた後は美形警備員の気絶体ばかりです。

そして長谷川は一本の電話を入れた。

そして長谷川は待ち合わせ場所に行つた。

そして長谷川は、スーパー下克上で一人の子供を待つた。

しかし待てども待てども子供は来なかつた。

変わりに聞こえてきたのは、サイレンだつた。

パトカーの。

警察の。

長谷川の頬を水が流れた。

空と同じ色をしている。

長谷川は自分とソラを照らし合わせた。

「手遅れ・・・・・・なのね。」

長谷川は、パトカーのほうへ一人歩いていった。

パトカーの音はどんどんどんどん近づいて・・・・・。

律子の前で止まつた。

パトカーは、もと来た途みちを進んでいく。

もひ、律子は自分の子供には会えない。

「や・・・・。」

律子は、息子の名前をつぶやいた。

もう一度と、彼には会えない。

おまけおまけおまけの出血大セールのおまけ。なんじやそりや。

咲霧花を忘れてませんか？

「わやいいん。」

律子が去った後、咲霧花は、泣いた。そして自分の能力を思い出す。桐原と同じ力を持つ自分の力を。

簡単に言つと幽体離脱。咲霧花風にいうと靈体変化。単に体を捨てて、宙に浮き上がるというものだ。

「靈体変化…………吃驚」

体からどんどん、魂が抜けていく。

そして一張羅の桂が。

ポロリ有りとなつた。

「Oh! No! Myzura! My dream is ふさふさの育毛。」

日本語訳で、まあ、どうしましよう。私の桂が。私の夢はふさふさの育毛・・・・かな。

そして一張羅の桂を捨ててまで、咲霧花は脱獄した。咲霧花の心もまた、どんより鼠色に曇りまくつていた。

「わしは彼の王を再び復活うーさせるのジャー。」

三日後、やつれた魂で帰ってきた咲霧花は、体に戻ろうとしたが、自分がいた檻の中には別の囚人、6 - - - がいた。

長谷川の元へと行くと、長谷川は執筆していた。

何かを。

「ああ。校長。貴方はたぶん靈体変化を使ったのでしょうか。三日もの間で死んだと思われた貴方は肉体が焼かれてどこかをさまよつている事でしょう。そんな貴方をNovelにします。

タイトルは・・・非科学のミステリー 最後之血族最後之野望。よし。これでいい。後は、ペンネーム。長谷川律子に捻りを入れて、長谷子律川これでいいわ。

「

半年後、なんとそれはミリオンセラーとなつた。校長は、その半年の間に靈沸净化を遂げた。

彼は生き続ける。

中古本屋
で。

八迫もそれを読んでいた。一応全巻。

「こんな事しかできねえくせに何が・・・。」

それは紐で括られていた。

感情に浸っている八迫に、竜太がやつてきた。

「この奥谷子津川にておしかじてある」

音ノガガを打てておれ、ておれ力

クリティカルヒットコンボ・イン・フェイス

顔面直撃連打

綺麗に決まつた。

そして更に紐で括られた本を角向きに投げつけた。

更に綺麗に決まつた。

脱走しましたW囚人（後書き）

次回予告

散々個人の都合で遅れてしまつた番外編。
季節感漂うかもしれない話もあつたのに、書けずじまい。
仕方がない。
ここでやらねば誰がやる！

季節はずれの花見大会、一番楽しみ一文字！

怒涛痛快ドメスティック、ヴァイオレンスストーリー【竜太と八迫の
みたまに理緒】ただいま出撃！

6・・・と作中に出ましたが、これはキーボードで打つと、【あほ
ほほ】になります。
暇だと思われましたね。

翌日のための前夜再活動報告書（前書き）

今回はねとある少年のお誕生日企画によって出来上がった物語なのだ。

放置していくすみませんですなのだ。

明日のための前夜再活動報告書

深夜の本部に、亮祐はいた。
手にある紙が握られていた。

背後にある仲間たちに振り返らずに語りかける。

「俺はこれから、買出しにいってくる。頼んだぜ。明日のために」
そう言うと紙とカード片手に本部の扉が少しづつ開かれて、閉じた。

背後にいた一人は

「これから飾り付けだな。よし、りゅーたやれ」
今では違法のサバイバルナイフを片手に持ち、竜太の首に当た八
迫はひざかつくんをして告げた。

「ふぶうう・・・」

その際、少し竜太の皮膚をめくつたらしい。

「ホラ、あんたが働きなさいよ。あんた人の下で働くの好きなんで
しょ」

今では知っている人すら少ないメリケンサックをはめて竜太のこめ
かみをへこました。

「にゅうひひひひ」

「すいません」

亮祐は店に来ていた。こんな夜中にやっている店に。

「はいよ。何をお求めですかね」

人差し指を額につけて首をかしげて一、三秒後、亮祐は答えた。

「ここから、ここまでかな」

さすがにお坊ちゃんは買い物の心得といつもの知らない。

店長はたなごと買い占める客にびっくり、口を開いてバーコードを
読んでいた。

そんなこんなで二人によるS行動により、作業はまったく持つて進んでいなかつた。

まったく持つて進んでいなかつた。

ドメスティックバイオレンス以外は。略称DVのそれ以外は。

「ただいま」

彼が帰つてきて吃驚した事はと訊ねられれば、こう答えるだろう。半裸の少年R君が鎖で上から下から縛られて涎垂らしながら揺れていた所です。と絶対に。

けれど少年、亮祐は答えられなかつた。

扉を開け、声が聞こえたとたん外から放送された箱の山がなだれ込んできたからだ。

その一番下で亮祐は遭難していた。

単純に言えば、遭難してた。つてこと。箱の下で。

亮祐が帰つてきたおかげで纏まりが取れた四人は早速明日のために働いていた。

作業中、八迫は亮祐に聞いた。

「買つてきたのか？」

亮祐は作業着を羽織ながら答えた。

「うん。って言うか見たでしょ、最初に来たときに

「遭難してたな～。おもしろしそうだつた」

「じゃあ、今度やつてみろよお」

言つた亮祐は八迫の顔を見た。

【うつわ～。すんげー嫌そうな顔してる!】

「お前、遭難してたなと聞かれたら答えはひとつだろうよ・・・。

【はふ?】

お坊ちゃんには答えが見当たらない。

首を傾げる亮祐にハ迫が親切に角材で突き飛ばして言つ。

「そこは《遭難です》だろうよお」

【心なしかそんな事でハ迫は泣いてないか?】

部屋の隅に固めておいてある箱の山を見て亮祐は思わず、微笑んでしまう。

「おい、お前のかおすんげえきもちわりい～マスクしろ。口だけ切り落としてもいいから」

ハ迫がマスクとメスを手のひらで渡した。

「選べ！」

にっこり笑つてゐる。

如何しようかと亮祐が悩んでいるその隅っこで、

「はふ、竜太。もつとへやの『デコレイション』を完成させなさい」
デコレイションはなんだか英語風に言つ理緒が格下奴隸竜太君に命令しました。

全員が一度、亮祐を見る。

「それでは各自、明日の朝までに準備を完成させよー。」

そういう終わるか否や、全員一の姿はこの部屋から飛び出していく
つた。

もちろん一は格下奴隸竜太君だ。

果たして明日の朝、一体何があるのか。

結構時間がたつてから、中央ホール内にて、
「おわったによろペヘー？」

何か言葉がおかしい。壊れているようだ亮祐八迫。
亮祐が理緒と八迫の前に物体Xを突き出す。

「途中でこれ拾つた。」

繩で引きずられても平気で寝ているなぜか全裸の竜太君でした。
八迫と理緒が顔を見合わせてとつてもエグイ顔で笑つた。
声をそろえて確かめ合う。

「塗り固めて首から下コンクリ。」

明日の朝は、すてきなテーブルになつているもよう。

【こちらの作法でモザイクは掛けたのですが、繩を巻くとき邪魔だ
つたようで外されてしまいました】

明日のための前夜再活動報告書（後書き）

このお話は、授業用記録自家製造本に書かれていたお話で、三部作構成となつております。

次回予告

ある少年のお誕生日を祝つため、三人 + 一個は動く！

あの日の活動報告記録【仮】

少年に、今まで出一一番良い思い出を。

あの田口活動報記録書（前書き）

生誕記念特集二部作小説第一部「これより開幕です。」

まず、目が覚めた俺は、体を動かした。動かしたかったから動かしたのだけれども、動かなかつた。

見ると、なぜか皆さんは横になられて睡眠中なのに、私の視点よりもはるか上にあるのでござります。

そしてなぜか和に響いたからかの事にして栗林ノ辻さんから贈呈しておられるのでござります。

る頭なのでうまく働かないのです。

そこで私は私に寄りかかっている少年、八迫さんに聞いてみると
にしたのです。

「すいませーん。ハ迫さん、私は一体どのよつたな状態に置かれているので」『やこま』しそうか、その黒き『宝石』のよつたな目で私を見てお教え願えませんでしょうか」

これで目が覚めるとは思れない
目が覚めたら今日は少の玉が握る
外出は控える。

理総や亮祐にはまるが遠くて寂しいのが見えていて、話かけても無駄だと思うので話しかけないとにする。

「最後の晩餐が肉まん！何たる事や！……」のよのおわりじ

理緒わんの寢言せ悲しきがや。

亮祐さんや、体をすらしてどんな夢を見ていらっしゃるのですか。そんなに変な夢でも「ひんに」なれていらっしゃるのでしょうか。

どちらにしても、私はここから出る事が出来ないのです。
皆さんがおさるのを体を石の」とへ硬くして待ちましょ」。

それから私の体内時計で一時間が過ぎました。

そして更に二時間が過ぎました頃でござりました。

「ああよおお～」

今日の主役の一文字悶太君が可愛らしき猫ちゃんパジャマで欠伸半分で起きて参りました。

そしてそのまま言葉をつなげて

「皆なんでこんな所で寝て・・・」

そこで悶太君は固まってしまいました。

どうやら私を見たようで、固まつております。

「なにやつてるの？」

まったく持つてその通りだと自分でも自覚しているのでしゃべりました。

答えてくれないの？といつ顔でこちらを見つめています。

「見ての通り埋まつてるのでござれこませけれどなんとかはそこいら辺で寝てる人に聞いてくれる？」

「遠慮しとく」

即答されました。

そこまでのやり取りで亮祐様が目をおあけになられ体を起こしました。

「あー・・・・・。おは三四、悶太」

それから部屋をぐるりと見てから、息を大きく大きく大きく吸つて、

「おきるー全員おきるー」

私ではおきなかつたのに、八迫さんがおきました。

理緒が悶太に向かつて

「ああ、おはよお」

「生誕十一周年おめでとうござります」「
八迫が焦点の合わない田だそういうこいました。

「たすけてえー」

私はそういうのですがかるく無視をされてしましました。いつももの事で慣れっこなので宜しいのですが。

亮祐が悶太に、

「オリエンテーションで「オリエンテーションってなにいー?」」途中で悶太君に話の腰を「キッ」と言ひ音ともに、折つてしましました。

「楽しい事、かな」

理緒が年配の女性として優しく教えてあげました。

「年配・・・・・。ふうーん」

なぜかこちらを向いてにっこり笑つて拳を握つておりますが。

「とにかく、オリエンテーションです。この屋敷内にある五十個のおもちゃを探してきてください」

「五十個?」

はるかに数えられる数よりも多い数字を聞いて悶太君は目を輝かせてています。

「じゃあ、じゃあ、行つてくるうー」

即座に着替えて【何処から出したんだか】即座に顔を洗つて【一体何処で洗つたのやら】即座に走り出して【なんか凄く早い】おもちゃ探しに出かけてきました。

「ねーこのばあいでかけるでいいのー」

私がしげられた顔で申しております。

が、無視なのは承知の上です。

まだまだ当日活動は続きます。

次回予告

少年はプレゼントを探しにはるか広い屋敷の中を縦横無尽、右往左往に駆け巡る！

なんか意味が違う気がしないでもないが。
そして少年にプレゼントを探させる間に三人釣りす一戸がする最後之費と仕上げとは一体！

活動記録報告書編二部作、いよいよ次回完結！

一文字悶太へ送る、最大最高の記念日！

あの日あの時の最高生誕記念活動報告記録書【仮】

いよいよ次かー 我らの名は、ジャクソンー。
切り裂きジャックを怨むものなり。
我らの名は、ジャクソンー。

この世の全てを怨むものなり。
我らの名は、ジャクソニー。

切り裂きジャック創設より、今このときまでに至る復讐の準備は長かった。

しかし、これより先には延ばせない。

我ら、ジャクソニーはこれより切り裂きジャックの本格的抹殺及び排除をはじめるものとする。

逆らうものには死を。
逆らわぬものには死を。
全てを切り捨てなぎ払い。
それが我らジャクソニー。
全てのものを切り捨て、なぎ払い、消滅させるものなり。

我らの名は、ジャクソン。

切り裂きジャックの殺戮を繰り返し、このよ殼抹消する事を決意する、眞の正義也。

我らが名を叫ぶがいい。

我らが名を刻むがいい。

我らが名を恐怖するがいい。

唯一にして絶対の我らが名は

ジャクソー。

自由な時間を。 反逆児（前書き）

誕生日の中編の話と話の間に一本短編を入れるってどうですかね。
なんか、楽しい気分を奪うようなそんな感じで・・・。
なんか、の本性がばれつてあるような気がする。
まあ、いいや。

この話はいつか本編【最近更新してない本編の切り裂きジャックは殺しません！】のことである】に出てくる反逆児最終編の伏線とか何とか。
でも、それがいつか分からぬからつながるかわからん。

やばい。中途半端なことしちゃった。
しかもいつちやつた・・・。
ヤヴェー。

自由な時間を。 反逆児

自由な時間を。 反逆児

午後の反逆児は、お茶を飲む。午後茶時間を楽しんでいる。右手にカップを。左手に小麦粉練製品を持っていた。唯一の午後の自由時間だ。

「グングニル？」

最近の右腕グングニルに右腕を突き出す。

おかわりの意味を持つ。入れろと求めている。

グングニルは深い闇から手を出し、カップにお茶を注ぐと質問した。

「いつも、この紅茶が好きですね」

それに答えずにしばらく黙る反逆児。

数分の白い時間があつた。

反逆児はゆっくりと右腕に尋ねる。

「先代の王は殺して正解だつたそうだろ？」

右腕は大きくうなずいて、右腕の時計を見た。

「そろそろ、始まりますか？」

「今日のメニューは何かな、グングニル」

ぱらぱらとファイルをめくり、目的のページを朗読した。

「伝説の初代切り裂きジャック、シャガンの朽ち果てた肉体から出された魂と、その妻の夫婦喧嘩を」

反逆児は屈託無く笑つた。

「ソウか、夫婦喧嘩か。面白いなあ。ソウだろ、竜魂剣」

腹部に収納した業火竜に冷たい目を向け尋ねた。

「業火竜よ、これから私はコロシアムでお遊戯の時間だ。お前にも遊んでもらえるのだろう？」

「お前の言うことなんて聞いてられるか。俺をここからだせ」

反逆児は豪火竜に苦しみを与えた。

「お前に選択権はない。有名なテレビをもして言つならば。お前に
は聞いてない！といったところだ」

「だま・・レ半額時」

「人の通り名を汚すのはいけないよ。竜虎路剣グングニル」
右腕のファイルを取り、大きく罰をつける。

「今日の仕事は止め」

反逆児は王室に戻つていった。

「我が主、七の切り裂きジャック。私はいつか貴方の元へと帰ります・・・」

竜魂剣の業火竜は反逆児に融合された体で決意を決めた。

「我的名はグングニル。王に成り代わり、地上をも破壊侵略するも
のなり。そのためには主、貴方は邪魔になってしまいますね・・・
グングニルが目をつぶると暗闇が広がつた。

三つの意志がぶつかるのはもう少しひどい。

自由な時間を。 反逆児（後書き）

次回予告

あの日最終報告書

お誕生日おめでたしー。（繪書）

これにて悶太君のお誕生日企画、これにて終了。

「ビートにあるのかなあ？」

悶太はあつちを「ひひひひひひひひひひ」と、プレゼントを探していました。

後十一個まで減らすことができました。

本部キッチン内にて

「おい、チョコクリームできたのかこのアホ野郎」

「ま・・・まだですう」

八迫に迫られ、竜太は肩身小さくなつた。そこに理緒がきて、

「クリームどころかチョコすらないわ」

亮祐が竜太の首をつかんだ。

「貴様はなにくつとるんじやああ。お前、一度この世からひよこおつとたびに出てみるか」「んにゃるおおおお」

そしてしゃもじでほほを十発二十発・・・・・。

ただいまケーキのクリームと土台を製作中だった。

「プランクトン！ 飾の飴細工は？」

「・・・・・・・・・。自分、不器用ですか」

最後まで言い終われずに理緒はジャーマンスープレックスが竜太に決まりました。

その瞬間、竜太はちょこっとこの世から去つて、戻つてきました。

「飴細工はですねえ、じつやつて作るんでござりますよう」

途端に理緒はおばちゃん化して教えました。

なんと飴でアメを再現。笑いましょう。笑わなければ画面の中からラリアットか、ジャーマンスープレックスが飛んできます。苦笑いじゃいけません。大声で笑わなければ。家族に不振がられるぐら位大きな声で高らかに笑いましょう。げはげはと笑いましょう。

「あーこんなところにもあ」

悶太のプレゼント探しは順調に進んでいました。

今こるところはトイレ。ほかにこの屋敷で隠すところはなかつたので「ございましょうか。絶対に部屋だけでプレゼントの個数分はあると思うのですが。何でトイrenaのか、なぞです。

ちなみに、このプレゼントを隠したのは平田竜太その人でした。あと、三つにまで減らしました。

「あと・・・、探してないのは・・・えつと・・・」

悶太は、かたまつてしましました。まだ探していない部屋といえばあの部屋だからです。恐怖の部屋。P-177の部屋。悶太が恐れていたあの部屋。

「ぬ。。。うう。・・・りよーすけえ。・・・」

少し恨めしいです。

「きいいいいいいいいいやああああああああああああああああ
部屋に入ったとたんに悶太の叫びがかすかに聞こえてきました。
一度部屋から出てきた悶太は竜太の汚室に行きました。

「「」一かりゅー？」

完全装備で竜太の部屋を探る悶太。竜に頼むようだった。

「いいですよ。」

「ありませんでした」

「・・・。苦労して探してもらつたもんだが、そんな部屋にはひとつもなかつた。

どうやらさりげんと配慮してあるようだつた。

そのころ、キッチンでは用意は終盤に差し掛かっていました。

「おい、そこ、テーブルに敷いて料理を運んでこい。それから真ん中にはケーキを飾るのである」

亮祐が若干マダム気に指揮を取る。

若干悶太にお熱のようだ。

これはとても危ないことになりそうで怖いです。

そうなったとき、この哀れな私にその線を引くことができるのではございましょうか。

「これで、準備完了だ！！！」

と、亮祐がいったとたんに扉が開きました。

亮祐、理緒、八迫それから竜太の四人は声をそろえて言いました。

「一文字悶太君、お誕生日、おめでとう！」

パーティーはこれから始まります。

ひとつ終わりました。本当に長期放置していく申し訳ありませんでした。

次回からもきっと長期放置になるでしょうが、お許しください。待っていてくれた皆様方、本当にありがとうございました。虫のいい話ではありますが、次回も、待っていてくれるといつれしいです。待たせないようここはいたしますので。

白い壊し屋？ TWO（前書き）

こんな話もどうですか？

つてか、悶太君つてこんなこと考えてたんですね・・・。

ちなみにいつもはなしさ大体大筋しか決めてなくて、その場その場で考えているといつても過言ではありませんので。

デモですね。たとえていうなれば、ガルガンティアの話を一例にすると、

- 1 変身不可能になる 負ける。ガルガンティア棺を出す。
- 2 竜太は別界死者の門よりそれ以外は棺で宙ぶらりん
- 3 死者の面から出た竜太のジャックに変化が 使つと死者の面
- 4 棺破壊、ガルガンティア自爆宣言
- 5 ディア博士が残したメッセージ

エヴァーニーン・サージェ、大量のハドー。

つてな具合です。

でも、この話だけが番号ついてるので別の話でも一例、たとえばメリアーサ篇の。

空機より殺意をこめて・・・。編

トルキシアと名乗る空軍の戦闘機が本部に銃撃。それはロボットへと姿を変える。

それは無人口ボット、ディア博士の一号機、メリアーサだった。本部で寝込んでいる悶太を守りながら撃破しろ！

つてな具合です。

でもこちらの話は短かつたので。

長いので言つと、構想中の業火の靈 イキヤバラ教編ですかね。

これ書いちやうと長いんですよ。アイテム何個か出てきてそれを回収、もしくは破壊しながら話を進める・・・つてな感じのもんですかね。めちゃくちゃ長くなると思います。

けれどそこまで書く度胸がないので省略はされんでしょうが・・・。
なんか悔しいですね・・・。
ではいんなんで！

白い壊し屋？ TWO

彼らが動き出したのは暗い日だった。

その日の月は薄暗く輝き、これからのことを見つめているかのようだつた。

しかし、それを月は誰にも教えない。

他人の不幸は蜜の味という言葉があるように、月のモットーはこれだからだ。

そんなある日、奴等は動き出した。

作戦を実行するべく、夜行性の彼らは赤い目をぎらぎらと光らせて動き出したのだ。

そんな彼らは薄い光の中、確かににやりと笑つた。

これから起じることを思考したからだろう。

それほどに、自身のある作戦なら……。

それはおそれく突然の史上最强最小の侵略といつても過言ではなかつた。

彼らは白い壊し屋といつ軍団だつた。

小さく小さく、そして破壊行為絶対の侵略が今、始まつとしていた。

その日、彼らの手によつて……。

その侵略は次の朝に、竜太の叫びによつて全員に晒されることとなつた。

彼らが起こしたその侵略を。

竜太の部屋にあるものはすべて形を崩されており、全てが何者かに削られた、もしくは齧られたと見られる傷跡が・・・。
竜太の集めていた深夜アニメのそういうもののフィギュアや、そういうものの本などが。

悶太は、気がついてしまった。

聞いてしまった、見てしまった。

何かが笑ったその声を。

そしてその何かが目を過ぎたのを。

犯人は奴等であると、悶太にはわかつた。

そして、今の自分では決して敵う筈も無いであるうといふことも・・・。

皆に伝えようと思つて踏みとどまつた。

歯がゆい・・・。

いつもいつも荷物になつてばかりだ・・・。

誰からも頼りにならない。

それでは、僕が切り裂きジャックである意味がない・・・。

僕が、みんなの力になりたい。

少年を動かしたのはそんな簡単な思いだつた。

龍魂剣の豪火竜についてきてもらえばいいだろつ。幸い、ハ迫が先日ミクロンジュースを完成させた。

その便を数本搔つ攫うとそのうちの一本を自分に、そして一本を豪火竜に飲んできつてきてもらい・・・。

『これで本当に、主は救われるのですね・・・』

豪火竜は怪しげに悶太に訊ねる。

「そうだよ。竜太が大事にしてたあんな物や、こんな物を壊されて
いるんだよ。だからね。それに」

悶太は一度言葉を区切つてから言葉をつなぐ。

「これは僕が切り裂きジャックとして認めてもらえる大事な試練な
んだ」

いつの間にか悶太は手に力を入れて力説していた。

それほどまでに自分に自信がなく、認めてほしいと思つていたのだ。

そして程なく、二人は小さい穴へと、入つていった。

そこは、暗く、暗く果てしなく続く彼らの魔窟であることに、二人
はやがて恐怖する。

「侵入者が来た。おそらくは、我等の支配下になるであろう者ども
からの刺客であると見ていいだろう。見つけ次第、即刻殺してしま
え。わかつたな。ニルヴァーナ。主だけが、我等の城を作る武器と

なれる「

黒い部屋の中で、赤い目が光り眩いていた。

そして、何もなかつたところに新しく赤い目が増えた。

「わかりました。父上。わたしが父上のための手足となるべく、働いてまいります」

目が、二つに戻りやがてその目も消え、その場所は暗く暗黒が場を制した。

白い壊し屋？ TWO（後書き）

次回、悶太と豪火竜に迫るニルヴァーナ。
ニルヴァーナとはいつたい何なのか！？

そして、彼らの正体は？

悶太は一人前の切り裂きジャックとして認めてもらえるのか？
意外などこから侵略キタアーニーーーーな白い壊しや編第一作、お楽
しみにしていただけるとうれしいでござります。

ニルヴァーナって何なんでしょうねー。

たぶんそれがあると力が強くなるよー的なズル技のアイテム形だと
思われます。

これ終わつたら豪火竜のお話でも書こうかなー

ちなみにですよ、豪火竜と龍魂剣の龍と竜の字でなかなか変換しづ
らいと試行錯誤しております。

豪火竜の話で本当の名前が明らかになつてそれでそつちでこれから
呼ぶことにしようかな、それがいいと思いませんか。

「お前が、父上の邪魔をする者か。父上の夢のためには、いてもらつては困るんだ。父上の夢、我らが存続のための場所。根城。そのためにはワタシ、ニルヴァーナがお前たちを止めなくてはいけない」いきなり一人の前に現れた黒いそれは、いきなり叫んだ。

「ニルヴァーナ……？」

豪火竜は何か思い出そうと考えている。

「そんなことより、こいつを何とかしなくちゃ、僕たちはここに駆除剤負けないんだってばあ」

悶太は両手をばたばたしながら豪火竜にすがる。

そんな悶太を豪火竜は一括する。

「自分が認められたいのなら、まずは自分で行動することだ・・・」

今まで仲良しだと思つてた豪火竜にいきなり一礼入れられてビックリする悶太。

「こいつの相手は私がします。今のうちに奥にいるはずの王座に仕掛けときなさい！」

悶太は腹を決めた。

「いてきます！」

悶太は、羅列も回らぬように急いで走つて行つた。

その姿を見ているだけのニルヴァーナ。

しばらくの間があつてやつと口を開いたのはニルヴァーナだつた。

「あの小僧に、ワタシの父上の邪魔をさせる気なのか？」

静かな口調だつたが、その目には憎しみが宿つていた。

「ワタシの願い『ウイツシユ』は、父上の力となり、こき使つても

らい・・・」

豪火竜の背後に回りこみ、ニルヴァーナは言葉を続ける。

「父上の我僕まで私の命を使い果たしてもらつこと。そのためには、お前と小僧を消す必要がある。しんでくれ」

ニルヴァーナが爪を鋭く伸ばし、豪火竜の首を狩る。

「火炎の咆哮！」

豪火竜もそれに咆哮で応戦し距離を置く。

「ニルヴァーナ・・・お前は、アレの生き残りなのか？」

その言葉を聞いてニルヴァーナは一瞬動きを止める。

「お前はどこまで知つているのだ・・・ニルヴァーナについて」

豪火竜が勝ち誇った笑みで答える。

「最初から、最後まで」

その言葉を聴いた途端にニルヴァーナが血相変えて襲い掛かる。

「鋼鉄の手爪！」

「爆炎の手爪！」

鉄の爪と炎の爪がぶつかり、暗いその場所に火花が散る。

「鋼鉄の！」

「爆炎の！」

「尾激！」

互いの尻尾がぶつかり合い、激しい風圧が当たりに散らばる。やがて、豪火竜の一撃によりニルヴァーナは膝をついた。

「貴様、いい加減ニルヴァーナのことを吐け！」

息切れしてきたニルヴァーナは豪火竜に叫び、地面をたたく。

「ニルヴァーナ・・・か。ニルヴァーナも知らん者がそれを手中に収め、使いこなせもしないのに其れで王様気取り・・・」

豪火竜はニルヴァーナの顔をに爪を突きつけ、

「今すぐ、ニルヴァーナをだせ。お前のニルヴァーナさえあれば、私が奴に戻る必要性などないのだ。ニルヴァーナがあれば、私は帰らなくていい」

言葉を確かめるよつに一言一言正確に話す。

「お前のニルヴァーナひとつで私はあの暖かい場所にいることが出来る。寒く暗く呪い渦巻く場所に行く必要性などなくなるのだから。さあ、ニルヴァーナ・・・。今すぐニルヴァーナを出せ」

ニルヴァーナは、その言葉を聴き笑い出す。

「俺のニルヴァーナは俺のもんだ。父上から授かつた俺のニルヴァーナだ。貴様に渡すぐらいなら、お前も道連れにしてやんよ。鋼鉄の粉塵！」

すべてを理解したニルヴァーナは自らの命と代償に相手を道連れにした。

「爆炎の翼風！」

豪火竜が自らの翼で来るものすべてを弾き返していた。

「私は、主を守るんだ！」

しばらく、明るくなつたあとに再びあたりは暗くなり、物音ひとつしなくなる。

時たま、荒い息遣いが聞こえるだけ。

「悶・・・太」

次ぐらいで終わるといれしい。

なかなか短編とか中篇のほうが性にあつてるよなーとか思います。
長編はなかなか話が進まないのに短編中篇だとすらすらって訳じや
ないけどそこそこの速度で書いちやう奴。

クラスに一人や二人いたでしょ?

あれ、おいらだけですか・・・。

一瞬にいつやつて書こうると話のつながりがわからなくなつて
言ひのですが、頭がいつかいつかになつてしまつたまつま
りません。

しばらく時間を置いてから見直して出せばよかつたですね。なんて
思つたりしたやつたりして。

また、あの声が来る。

あの声が
・
・
・
。

暗い中、悶太は走つていった。

段に立つて立つてな

この作戦は失敗してしまった。

仕掛けられたのを壊されてじつは、だから
彼で妹つたく歯が立たなかつた。

結局僕はまた誰の役にも立つことはできないのか・・・。

仲間のために、認めておかねばならぬとしているのに、却た縦同

は守つてもらうだけのお荷物……

僕は、駄目なのか・・・。

そう思つて走つていたとき、何かにぶつかつてしまつた。弾力のある、何かにぶつかつた。

そして、あの声が響いてくる。

い
ト

「うぬは諦め、おわるべき運命なんだ・・・

トラベラーを構えようと/orして腰に手を伸ばすが、トラベラーを手に取る事なく腰を通過する。

「うぬが探しているのはこちらの子供じみた玩具かな？」

手の中でボキボキと音を立てて捻じ曲がり、パラパラと音を立てて割れ始め、トラベラーではなくなつていった。

「それを・・・、かえせ・・・」

それは亮祐がくれたものだから。始めて亮祐がくれたものだから。初めて認めてくれた、物だから。

・・・！

初めて認めてくれた物。

認められてたんだ。

もうひとつくに。

無理して入れてもらおうとしないで、今まで道理の僕で居て、今まで道理の家族みたいに居ればいいんだ。

そう思つたら、なぜか力がわいた気がした。もう、認めてもらえていたつて知つたから。もう、無理しなくていいとわかつたから。

「お前にトラベラーは壊せない。絶対に。僕が無理していたのが判つて、もう無理しなくていいとわかつたから。何度壊されても、僕はお前に負けない」
決心がついた。

もう、僕は弱くなんかないから。

「トラベラー！」

叫んでみたら、手の中には壊れていたトラベラーが元通りに、違う、スケールアップして戻つてきてくれた。

「トラベラー！」

もつと、

「トラベラー！！！」

こんなのが限界じゃない。突破して、もつともつと限界なんか超えて・・・。

「トラベラー」

「ぬしが我に勝てることなど、どんな事情があろうともそれは覆ることはない。わが名はジャニュエル。

城を壊し、黒を導く者。そして、侵略者を許さぬ絶対の者」
ジャニュエルが手に持っていた杖を悶太に突きつけて叫ぶ

「黒影の舞／影人形／」

杖から黒い影がいくつもいくつも出てきて、悶太を取り囲む。

「僕は、負けることない。わかつたから」

悶太が大きく息を吸い、トラベラーを構える。

「トラベラー、影縫い！」

トラベラーからいくつもの光が出て、人形を一体一体貫き、消していく。

「俺は、お前に負けたりしないんだあ！乱射光弾聖一矢」
トラベラーから出た光が、周りを明るく照らした。

そしてそこに浮かび上がったジャニュエルの姿は鼠だつた。

「私は決して侵略を止めない！これからここで、ニルヴァーナと新しい城を作り上げるのだ」

光が、貫いた。

「ニルヴァーナ。私とお前の新しい城は、そちらにあるといつ」と

か・・・。お前はもう、そこで新しい城を作っているのか？」

それが、ジャニュエルの最後の言葉となつて・・・。

「これで、駆除完了したのかな？」

悶太は首をかしげた。

悶太が出て行つたあと、そこには仲間が居た。

「ありがとな。悶太」

ハ迫と亮祐が頭をなでてくれて、

「すごいわよ、悶太」

理緒があめを箱で渡して、

「ありがと・・・悶太」

竜太が半べそでお礼を言つ。

もう大丈夫。僕はきちんと輪に入つていける。

「ニルヴァーナ・・・奴が、ニルヴァーナを・・・」

豪火竜がそれからしばらく、ニルヴァーナについて、ずっと調べていた・・・。

? DRAGON (後書き)

これで、豪火竜の話に移らうかと思います。
以上！

古龍豪火竜（前書き）

で。

山の奥底にそれは存在していた。

何者も来ないような岩山の奥底でそれは存在していた。
何も知らぬ、そしてこれからも何も知ることも無いまま終わつてい
く命が其処にはあつたはずだつた。

彼が呼び起すまでは。

何ゆえ彼は力を欲したのか。
何ゆえ彼は力を見つけたのか。

それは現代に至るまで解明されていない。

現代の彼らの書物の中にも彼に関するものだけは全て失われていた。
それは誰かの思惑によるものか、自然にか。
只の一冊だけを除いて。

彼のことは何一つ解明されてはいない。

彼は何かに敗れてそれを打ち倒すべく力を求めたと、書かれていた。

その一冊に乗つてゐるのは彼とその龍についての話。
彼は切り裂きジャック。

龍は豪火竜。

切り裂きジャックは何ゆえか、力を求めた。

各自、自由気ままに休暇をとれー！？（前書き）

豪火竜のお話が止まっていますね。

それなのにこれを送つてしましましたね。

大変ですね。

豪火竜の話は延期、といつことどよろじいでしようかね。

大変申し訳ありませんです。

はい。

ちなみに本編で一週間の休暇編始動とかほざいて石版の話に入つてしまつた埋め合わせ的物と考えてくださいれば結構です。

時間軸はそこらへんです。

本編には入れられないなあと思いまして。

こちらの身勝手な理由ですが。

ちなみに今シリーズは久々にノートを引っ張り出してそこへ下書きしてからという懐かしい方法をとらせていただきました。

きちんと完結はしておりますので時間さえあればすぐにでも完結することができますね。

とこう長つたらじい前置きは置いておいてはじめまひよ

各自、自由気ままに休暇をとれ！？

ある日、切り裂きジャック本部内ではある計画が練られていた。それは連日のごとごとの疲労をいつまでも引きずつていってはいけないと言う思案から元に出された計画だった。

各自に一日の自由な休暇を取らせようということになつたのだ。

紋太は亮祐とある場所に出かけ、
理緒はとある人物と出かけ、
ハ迫はとある物をてに入れに外出、
竜太はとある再試を受けに休日登校。
という各自の充実した休日を過ごすことを許されたのだった。

そして、休日は思いもよらぬ形で各入らを攻めてくるのだった。

各自、自由気ままに休暇をとれ！？（後書き）

これより、各人の休暇内容を発表してもらいます。
それでは一番手、亮祐君と紋太君。

絶叫回避ーーーーー（前書き）

各自自由な休暇を提出した切り裂きジャック御一行の休日報告ーーーーー！

絕叫回避！！！！

彼は今、自らの生命の終わりが今ではないか？と実感していた。実際にこれまでの少ない人生で体験していった出来事が浮かんでは消えて、浮かんでは消えていくからだ。

その理由は彼の目前にあつた。

巨大な機械。それは一周してもどの場所に戻つてくる。ゆっくりと回転して、元の場所へと戻つてくる。

だつた。

そして彼の周りには子連れの家族や、出来たてだかなんだかのカップル。誰一人としてその場に一人でいるものはいなかつた。かくゆう彼も一人ではなかつた。

彼、亮祐は目線を下げる、下を向く。そこにはいるのは自分の家族。
—

今、中片亮祐と一文字紋太は人生初の遊園地に来ていた。
すでに、お化け屋敷やメリーゴーランドなどのマイナーな乗り物は
全て乗った。

そして日も暮れ終わりが近づき最後となつた乗り物、観覧車の前で亮祐は先ほどから立ちすくんでいた。

亮祐の脳内サイレンが鳴り響く。

と、いつか響き渡りまくつている。

亮祐はそんなことを脳の大半を埋め尽くしつつじみの発端を思い出していた。

突然理緒が叫びながら駆け込んできたのだった。

「当たった当たった当たった当たったのよおおお！！！マジで」
その台詞に食いついたのが厄介だと大好きなサディスティックフレ
ンドハ迫だつた。

「あにか？？」

「遊園地つて何？」
待券であることが判明し、さらに誰が行くかとの発展でどどめとなつたのが紋太の一言、
に時は遅く、それが遊園地のチケットであること、それがペアご招待で聞いたのをとめていればよかつたのかもしれない。けれどす

だつた。

紋太にしてみれば、ただの知らない単語を聞き、それを知りたいと言ふ好奇心から来た言葉だろうが、それを聞いてしまったほかの皆様からの視線は痛かつた。

「お前今まで一度も連れて行ってやらなかつたのかよ」「金持ちの癖にそんな程度の娯楽すら味わつたことないの?」

それを必死に連れて行きませんでしたと訴えたのも、過去のことであり、それを聞いた理緒が哀れみの眼差しで亮祐にチケットを渡す。「ここに・・・います・・・」思わずつぶやいてしまう。

きっとハ迫は自分が高所恐怖症であることを知つてでの発言だろうし、これは嫌がらせに他ならない！！

単に紋太を遊園地に連れて行かなかつたのではない。
連れて行かなかつたのぢ。連れて行つてやりといふ

子供は観覧車が、好きという統計アンケート【2009年版】を見

てしまつてからひ到底言ひ出せなくなつてしまつて……。

「ねえ、行かないの？」

紋太のまちきれずわくわくの田でわいわい尋ねられると歸りいつとて
もいえずこ、亮祐はついに観覧車の列に並んでしまつた。

これは、どんな敵よりも今迄で一番手ごわい……。

亮祐は自分の恐怖心と戦いながらそう思つた。

絶叫回避ーーーーー(後書き)

次回 少女と少年【仮】

悠里の目の前で、理緒が倒れた。再び立ち上がりつつあるがそれすらも許されない。

それを見て悠里は今自分が何処にいるかを改めて実感してしまった。思わず足が動いて助けに行こうとしてしまう。しかし、今の自分では逆に足手まといになってしまつ。道は開くことが出来る。けれどもそのあとが問題だ。今の自分の眼力では見極めることなど出来ない・・・。

それに今、自分に課せられて指名がある今、ここを動くことすら許されない。

だから・・・だから今の自分に出来るのは、自分の使命を全うし、自らの妹、理緒を信じじることだけだった。

そもそもの始まりは、今朝の一撃から始まつたことだった。

それは早朝の五時に遡る。

悠里はそのとき、暖かい毛布の中でぐくぐくと睡眠をとつていた。悠里はその日の遅くまでひたすらパソコンの中で戦つていた。何ど。とは言わぬが必死に戦つていた。それからの睡眠だったため、有利の睡眠は浅かつた。

だから、今起こされると非常に本日に差し支える。

そこに、理緒の本気のドロップキックが高速で飛んできたとき、避けられずベッドから、暖かい聖地からの追放を受けたのだった。

悠里は寝ぼけた眼で今まで自分が幸せに漫つていた場所に立つている妹をにらんだ。

「あに？」

昨日妹が拾ってきた鶏はまだ鳴いていないのを確認し自分を蹴落とし堂々とベッドに立つ妹に再度尋ねた。

「一体何事で？」

寝ぼけ眼で聞いてくる哀れな兄に向かつて妹はカレンダーを指差した。

「これをみたまえい！――今日が何の日か覚えてないとぬかすかあ！」

寝起きの頭にそれほど複雑なことを言われても困る・・・。妹の誕生日でもなんでもない。

何がなにやら悠里には全く分からぬ。

その思考中の顔を見て、迷わずラリアットが来るので枕で防ぐ。避けられるほど目が覚めてもいい。

「こんのたわけえええー！！！」

枕で防がれた理緒はすかさず反対の手で後頭部を狙う。

それを防いだ悠里はさらに体を反転させ回し蹴り【寝起き威力半減版】を繰り出し、それを受け止めた理緒が足を持つて腹部に拳を叩き込んで・・・。

そんなこんなな寝起きで早速銭湯というハイな日覚めで朝を迎えた悠里はカレンダーに歩み寄り先ほど利緒が指差した日付、今日の場所を見た。

『マカデミアデパート新神町秋物20~40%OFF』

と『一寧に赤などの色ペンを使い女の子らしく強調された文字が悠里のカレンダーに記されていた。

これからおそらく大量の荷物もちであるだらつといつ事が予想がついてしまつ。

大きく息を吐き出してから悠里はいまだベッドで仁王立ちを続ける理緒に向かつて

「大体分かつたから支度して来い」

と告げた。

結局朝の五時に起されたといつて家を出たのは七時半となつてしまつた。

朝のあの無駄な田覚ましがなればあと一時間は確実にぬぐぬぐでいたといつて。

悠里と理緒は死闘の渦に巻き込まれ始めていた。

汝は何を買い求めるか

『切れのある深い味わいNEWブレンンドコーヒー・アダマンタイト！新発売っ……！』

『ミルクのこくこく……さらに加わるマジカルなカロリーオフの味！カロリーアーヌ』

そのCMを見たのは今朝だつた。

今朝、ソファーでテレビを眺めていたときだつた。新製品と聞けば食いつく八迫にとってそれは聞き捨てならないCMだつた。それを見た瞬間、一日中家にいるつもりだつた思考が一瞬にして切り替わる。

これを買いに行くという思考に。

そして至る現在、八迫は悩んでいた。

目前にある缶コーヒー、アダマンタイトとカフェオーレのカロリーアーヌ。どちらも今朝宣伝されていた、そして八迫が気になつてing一つの飲み物だ。

どちらもほしい。だが今現在持つてきている財布に入つている硬貨は三桁の一番小さい額、一枚のみだ。

先刻本屋にぶらりと立ち寄り馬鹿の様に大人買いして待つたつけが回つてくる。それを理解すると今自分の両手に下がつている重りが鬱陶しく見えてきてしまつてどうしようもない。さらにそれを理解したことによつて手がしごれてきてしまつた。

田の前にあるのは自らが求めていた一つの飲料。どーする、どーするよ！俺！状態なのだ。

ふと八迫の田の端に軍隊のように押し寄せてくる主婦の集団を見つ

けてしまった。何とハ迫はすでにここで一時間半ほど立ちすくんでいたのだった。そして、今の時間はちょうど主婦達の狙いの時間らしく、新製品好きの主婦の手によって一本、一本と減っていく。

ハ迫には解っていた。

このままでは・・・このまま悩み続けていてもどちらも買いつぶしができなくなってしまうということに。

必ず自分には一本も手に入ることがないだろうということも。

ハ迫はついに決心した。そして一本のカフェオーレ、カロリアーヌに手を伸ばした。

「ああ、これで一本、俺の手に入る・・・」

そう思いながら、手を伸ばしたハ迫の手が空をつかむ。

それどころか、箱自体の存在が消失していた。主婦の一人が、箱買ひをしたらしい。

しかたない。と空をつかんだ手を反対の缶コーヒー、アダマンタイトに手を伸ばす。

伸ばそうとしたのだが背後から鋭い殺気がその空間を支配した。そしてその殺氣で一瞬油断したことが命取りとなつた。

ハ迫の背後から殺氣を放ち時間を支配した主婦がアダマンタイを買ひ口めて消えていった。

こうして新商品とハ迫の戦いは白く固まつた石膏像のような物体を作り、終わった・・・。

そして、動けるよつになつたハ迫の前に残されているのはアダマンタイトと、カロリアーヌの値札。そしてかさ上げのための空箱。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7964e/>

切り裂きジャックは殺しません!裏面?

2010年12月13日01時24分発行